

1 国 語 科

羽場邦子・岩本和貴・谷 栄次

1 国語科における「自立」の基本的な考え方

一人ひとりが自立に向かうためには、自ら学習すべき課題を見つけ、課題解決のための方法を考え、追求するなど「自分の力で学ぶ」ことを重視しなければならない。子どもたちは、ことばを読んだり、書いたり、聞いたり、話したりする活動を通して、「もの」「こと」をとらえる。それを言語活動を通じてより確かに、より豊かなものにしていくことが、国語科における「学び」とされている。

一斉授業における言語活動の場面では、お互いの考えや感じたことをことばを介して伝え合うことで、一人ひとりの学習意欲が刺激されたり、ものの見方が広がったり、考え方に新たな視点が加わったりする。つまり、一人ひとりの「学び」がかかわってきて「学び合い」を生むことにより、さらに「自分の力で学ぶ」ことを確かなものにしていき、「学び」の質的向上を図ることができるのである。

このような考え方を踏まえて、本校では、国語科において「子どもが自立に向かう」ことを次のように定義した。

ことばを媒体とした主体的な言語活動（読むこと・聞くこと・話すこと・書くこと）を通して、ものの見方・考え方・感じ方をより確かに、より豊かにしていき、自分を見つめ常に向上していこうとする力を身につけていくこと

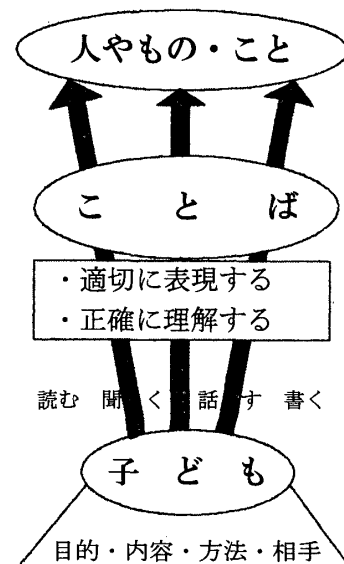
2 サブテーマ「人やものとかかわることを大切にしていこう」のとらえ方

国語科の学習で子どもたちが出会う「もの」「こと」は教材である。教材と向き合うことで自分なりの課題をもち、話し合いの中で他人や新しい自分の考えと出あい、かかわりあい、ことばとの関係を深めていく。教材に対する意識が高まれば、学習の場で、ものの見方や考え方・感じ方をより一層広げたり、深めたりすることができるだろう。

一斉授業の形態における国語科の学習とは、教材を通じて、ことばを学び、ことばを使い、ことばと向き合うことで、他人のもつ様々な言語活動の経験とかかわりあうことだと考えることができる。そのようなかかわりの中で、自己認識力とコミュニケーション能力を高めることができる。前者は自己のうちに、意見・感想・疑問などの認識を確立できること、後者は、自己の認識を他人の認識と比較・対象化して、相違を明らかにしたり、考えや立場を伝えたりできることだと考える。学習指導要領に提示された「伝え合う」力に相当するものと言えるだろう。

このような力が身につくことで、自分自身の言語活動を磨き、より豊かなものにしていくことができるだろう。他人の考えと向き合い、自分自身を見つめる活動を繰り返すことで、自他へのかかわり方の広がりや質的な深まりも期待できる。

具体的な支援として、「なぜ（目的）」「何を（内容）」「どのように（方法）」「だれに（相手）」を明確にし、子どもの「学び」の支えになるような場の設定を工夫したい。また、そ



れが生きて働くものになるためには、日常化を図ることが必要となる。表現することを楽しみ、お互いが認め支え合う中で、ことばが磨き合える場を意図的に設定したい。

このような「学ぶ」を積み重ねることにより、子どもたち一人ひとりがことばにこだわりをもちながら、人・もの・こと全てを含む自分を取り巻く世界に主体的にかかわろうとするようにしていきたいと考えている。

3 テーマに迫る授業の具現化

(1) 主体的に「学ぶ」ことをめざして

子どもが主体的に学ぶためには、授業がおもしろくて魅力のあるものにならないといけない。自らが課題をもち、それを解決しようと考え、懸命になって活動しているとき、あるいは、活動をしていて好奇心や問題意識をかき立てられているとき、子どもたちは自然と生き生きとした表情になるにちがいない。そうした授業を実現するために、子どもの側に立った学習過程を重視し、次のことを大切にしていきたい。

- ①これまでの言語活動から一人ひとりの実態を把握すること
- ②子どもたちにとって切実で目的意識のある課題になるように支援すること
- ③問題解決の具体的な方法（学び方）を考える場を保障すること
- ④自分の考えにもとづいて、解決しようとする主体性を重視すること
- ⑤ふりかえりの場を設け、学びの成果とさらなる課題が自覚できるようにすること

(2) 「学び合い」による質的な高まりをめざして

「学び合い」を成立させるためには、「伝え合う」力を重視する必要がある、「聞き合い」「話し合い」活動がその中心となる。「合う」ということばの中に、一方通行でない相互理解・相互交流の意味が含まれている。単に相手の話す内容を理解すればよいということではなく、相手の意図などの内面に迫るものでなければならない。さらに、相手に対して自分の思いや考えを伝えようとする姿勢も大切である。そのような「伝え合う」力が「学び合い」を支え、成立させると言っても過言ではないだろう。

実践にあたっては、子どもたちが「学び合い」をすることの価値を実感できるものになることが大切である。子どもたちが価値を実感できるのは、次のような場合と考える。

- 自分の思いや考えが認められ、生かされた場合
- 自分の思いや考えと違うものに気づき、納得できた場合
- 自分の思いや考えがさらに深まった場合

そのために、必要な教師の働きかけとしては、次のことが考えられる。

- 何についての「学び合い」かを明確にするために、焦点化すること
- 「学び合い」に参加できるように、他人の考えをじゅうぶんに聴き、共通点や相違点を整理し、一人ひとりが自分の考えをもつこと
- 「学び合い」が深まるように、自分の考えを明確に表現し、伝え合うこと
- 「学び合い」によって明らかになったことをふりかえる場を保障すること

4 国語科と総合的な学習との連携

総合的な学習でも、様々な場面において言語活動（聞くこと・話すこと、読むこと、書くこと）が重要な役割を果たすことになる。国語科で系統的・継続的に積み上げられてきた力を発揮し、さらに確かなものとして定着を図る場として期待できる。

今、大切にしなければならないことは、国語科と総合的な学習について、ことばの力を培うための相乗効果をもたらすような連携を図ることだと考えている。

5 成果と課題

昨年度の課題として、次の3点に着目した。

①課題づくりの場面において、

・初発の感想を共有する場、自他の課題を比較・関連させる場を保障し、課題が断片化しないように配慮しなければならない。

②問題解決に向け、子どもたちが確かな考え（方法）をもつ場面において、

・ふりかえりがスパイラルに連続する学習の取り組みを構成するために、常にふりかえりをどう生かすのか、意識しなくてはならない。

③より質の高い学習をめざしたふりかえりの場において、

・子どもたちの意欲・関心の支えとなり、「学び合う」必要性を感じる指導・支援が行われているか、さらに丁寧に見取っていかなければならない。

①課題づくりの重要性を再認識し、課題の質を高めることが、②③の追求・ふりかえりの質も高めると考えた。そこで身についた力が、教室という枠を越えて「実の場」でよりたくましく働く力となるのではないか。今年度の成果と課題を、一人ひとりの思いの集約されていく過程が子どもたち自身にわかる「課題づくり」の場を中心に、整理してみたい。

①「課題づくり」の場における支援

○初発の感想の視点が多様化し、課題に広がりが見られるようになった。

○「課題づくり」における学び方が定着し、子どもたちがめあてと見通しをもって学習に取り組み、課題を整理できるようになった。

●子どもたち個人の「課題づくり」の質の違いをどう埋めていくか、どのような支援が可能か、考えていく必要がある。

②「課題づくり」から課題解決に向かう子どもたちが、確かな考えをもつための支援

○課題解決のための学習や話し合いの仕方が定着し、その中で文章を客観的に評価する姿勢が育ってきた。

○課題解決の過程で、子ども同士の意見がかかわるようになり、話し合いに深まりが見られる。

○評価読みを重視することによって、文章の内容ばかりでなく、文章構成やテーマ設定、文章の質そのものなどにかかわる読みなど、抽象度の高い思考が可能になった。

○教材文が自分にとってどう値打ちのあるものなのか、判断する力が育っている。

●子どもに任せることのできる話し合いは何か、子ども同士の意見のかかわりをどう仕組んでいくか、どこに話し合いのポイントをおくかなど、事前の授業設計に更に工夫が必要である。

③より質の高い「課題づくり」をめざしたふりかえりの場をもつための支援

○学習内容だけでなく、発表の仕方・話し合いの進め方について、ふりかえりができるようになった。単元全体や一単位時間のふりかえりの場が定着してきている。

●ふりかえりの結果、学習の質がどのように高まっているのか、評価の観点を明確にし、子どもたちが実感できるようにする必要がある。

「課題づくり」の質を高める実践によって、子どもたち同士の考えのかかわりが更に深まっているようだ。その結果、文章や友だちの意見を評価する力も育っている。今後は、「ことばとかかわる力」「ことばでかかわる力」を高めることができるように、

1) かかわりの深まる主体的な話し合いをもつことができる単元設定・授業計画を立てる。

2) ふりかえりから、自分やクラスの「課題づくり」、課題解決のための学び方を適切に評価できるようにする。

という2点に焦点を当て、取り組みを進めていきたい。